

『透明な檻の中で4』

～「正しさ」と「外側」の連鎖～



KHI岡山きびの会 ふじさん

目 次

序章：空虚な優等生（翔太の視点）	2
第一章：役割の終焉（正志の視点）	3
第二章：外部の視線と再会（陽菜と翔太）	3
第三章：家族の崩壊と隠蔽（美和の視点）	
1. 完璧な舞台の亀裂	4
2. 偏見という名のセメント	5
3. 正志の沈黙と罪悪感	5
第四章：規範という名の壁（正志と翔太の対決）	
1. 誠一の言葉と正志の自問	6
2. 父と息子の真実	7
3. 規範の解体	7
終章：荒野に咲く花	
1. 規範からの解放	8
2. 表現の共鳴	8
3. 壁は、自分自身だ	9
登場人物紹介	10
あとがき（作者の言葉）	11

『透明な檻の中で4』～「正しさ」と「外側」の連鎖～

序章：空虚な優等生（翔太の視点）

誰もが「正しい道」だと褒めそやしたレールの上で、高橋翔太は息を殺して歩いていた。

東京。名門大学の講義室。彼は最前列に座り、教授の言葉を一語一句、ノートに書き写す。周囲は活気に満ち、誰もが自己実現や夢について語り合っている。

翔太は、その熱狂の中にいる自分の姿を、まるで遠い星の出来事のように感じていた。

「翔太くん、次のインターン、外資系コンサルに決まったって？さすが、やる事が違うね」「ああ、まあね。将来を考えたら、避けては通れない道だから」

笑顔を作る。その笑顔は完璧で、自信に満ち溢れている。父・正志、元中学校教師の誇り。母・美和が地域社会で築き上げた「高橋家は立派だ」という評判を支える、模範的な長男の顔だ。

しかし、夜。六畳のアパートの部屋に戻ると、その仮面は音もなく剥がれ落ちる。

法学部の専門書、資格試験のテキスト。それらはすべて、彼が心から興味のない、ただ「正解」とされている知識の山だ。

彼は、自分の人生が、父が引いた白線の上を歩く一日のノルマでしかないことに気づいていた。

「光希（こうき）のように、なっちはいけない」

それは、故郷に帰るたび、両親の沈黙が彼に投げかける無言の呪文だった。隣家の光希が部屋に閉じこもった時、両親は一切口に出さなかったが、その空気は明確だった。

「お前は、みんなと同じように、ちゃんとしなさい。人に迷惑をかけず、立派に生きなさい」

その呪文が、翔太の「優等生の仮面」という透明な檻の素材だった。檻の外に出ることは、すべての期待を裏切り、両親の人生そのものを否定することになる。それは、光希が感じた「傷つくことへの恐怖」とはまた違う、「存在が否定される恐怖」だった。

ある深夜、翔太はSNSのニュースフィードを辿るうち、匿名でアップロードされた一つの短い動画に行き当たった。

タイトルは「風の音と檻の風景」。

モノクロの荒野、揺れる風、そして、荒野に立つ人物の足元に小さく咲く名もなき花。BGMは静かな心音のようなリズムだ。

テロップが流れる。

「私は、誰もいない荒野で、自分の影から逃げようとしていた。影は消えない。それは、自分自身だからだ。傷つくのが怖くて、私は死んだように生きた。」

翔太の胸に、冷たいものが流れ込んだ。彼は、この風景を知っている。これは、隣家の光希が描いていた、あの未完成の絵のモチーフに酷似していた。

動画の制作者は不明。だが、画面から伝わる静かな「痛み」と「諦め」は、彼の心の中の空虚な部分と強く共鳴した。光希が、あの中の人物的なのだろうか。

翔太は、この表現には、自分の「優等生の仮面」の裏にある、本当の自分が求めている何かが含まれていると直感した。

「檻の風景…」

彼は、もう一度動画を再生し、目を閉じ、東京の喧騒から逃れて、自分自身の「荒野」にいるかの

ような錯覚に陥った。

第一章：役割の終焉（正志の視点）

四月。桜が散り始めた頃、高橋正志は長年勤めた中学校の教師を定年退職した。

「高橋先生、長年のご指導、本当にありがとうございました。先生の『正しさ』が、この地域の教育の基盤でした」

地域の長老や、PTAの代表から惜しみない賛辞が贈られた。正志は常に背筋を伸ばし、感謝の言葉を述べた。

正志は、自分の人生が、「教師という役割」という名の透明な檻の中で完成されたものだと思っていた。その檻の中で、彼は揺るぎない規範を振りかざし、地域の子どもたち、そして自分の家族を「正しい道」へと導いてきた。

しかし、自宅に戻り、スーツを脱いだ瞬間、得も言われぬ空虚感が正志を襲った。

「…私は、教師ではないとき、何者なんだ？」

妻・美和は、そんな夫を注意深く観察していた。

「あなた、今日はゆっくり休んで。でも、近所の運動会の役員の話も来ているでしょう？退職しても、あなたは地域の『顔』なのよ。無様な姿は見せないでね」

美和の言葉は、正志に対する「規範を維持せよ」という無言の命令だった。美和の檻は、正志の社会的地位に依存する「世間体」という透明な壁でできていた。

その週の週末、正志は隣家の藤森誠一から誘いを受け、囲碁盤を挟んだ。

誠一は、義蔵の死後、言葉は少ないながらも、以前より感情を表すようになっていた。

「…高橋さん。私は、義父から沈黙しか学ばなかった。それが、家族への愛だと、長年、自分を騙してきた」

誠一が、光希の問題を通じて初めて「沈黙の責任」を自覚したことに、正志は内心、驚いた。

「藤森さん…。私も、光希くんの件では、教師として、正しい道を示すことばかりを考えていた。彼の『痛み』を、見ていなかった」

正志は、光希の未完成の絵、そして、誠一の「沈黙の檻」が崩れ始めた姿を目の当たりにし、自分自身の「規範の檻」もまた、他者の痛みを遮断する壁だったのではないかと自覚し始める。

「あなたの『正しさ』は、光希くんを救いましたか？」

誠一の目線は、そう問いかけていた。正志の教師人生の終わりに、彼の信念が揺らぎ始めた瞬間だった。

第二章：外部の視線と再会（陽菜と翔太）

東京の小さな映像制作会社のオフィス。佐々木陽菜は、モニターに向かって真剣な表情で編集作業をしていた。

彼女のテーマは、「規範からの逸脱」。

「この国の社会は、『みんなと同じ』であることに異常な価値を置きすぎる。私の両親みたいに、少しでもレールから外れると、途端に『問題児』か『異端』の烙印を押される」

陽菜の両親は、彼女が幼い頃、地域社会の反対を押し切って駆け落ち同然で結婚し、貧しいなが

らも必死に生きてきた。そのせいで、彼女は地域の中で常に「外部の人間」として扱われ、学校では高橋先生のような「規範の番人」から、遠回しな指導を受けてきた。

彼女の「自由」は、社会の「偏見」という名の檻を打ち破るための、血の滲むような挑戦の結果だった。

その日、クライアントとの打ち合わせで、翔太と陽菜は劇的な再会を果たした。

「あー、翔太くんじゃん。高橋先生の立派な息子さん！相変わらず、隙のない優等生ぶりだ」

陽菜の言葉は、率直で、翔太の仮面を剥がそうとするような鋭さがあった。

翔太は、陽菜の飾らない、奔放な姿に動揺した。

「佐々木、君こそ、ずいぶん自由にやっているな」「自由？違うよ。これは、私の親が地域で受けた偏見と、私を感じた窒息感への、最大の抵抗だよ。で、翔太くん。あなたは今、何と戦ってるの？」

翔太は言葉に詰まった。彼は戦っていなかった。ただ、期待という名のレールの上を、逃げるように走っていただけだったからだ。

陽菜は続けた。

「あなたは光希と似ている。あの子は外に出るのが怖くて、あなたはレールから外れるのが怖い。檻の形が違うだけでしょ？」

陽菜の指摘は、翔太の心の最も弱い部分を貫いた。光希が、内向的な自己否定の檻の中にいるのに対し、翔太は外向的な期待という名の檻の中に閉じこもっていた。

陽菜は、自分の制作中のドキュメンタリーについて語り始めた。テーマは「日本における『正しい家族』幻想」。

「ねえ、翔太くん。私、次のドキュメンタリー、あなたの故郷で撮りたいんだ。あなたの父さんが築いた『正しい規範』の裏で、どれだけの人が息苦しさを感じていたか。そして、あなたの父さんのレールから外れた、うちの両親のような『外部の物語』を撮りたい。手伝ってくれない？」

翔太の心に、激しい衝動が走った。それは、父の敷いたレールから逸脱する恐怖と、自分の本音を表現したいという渴望の、激しい衝突だった。

彼は、光希の動画の荒野を思い浮かべた。自分もあの荒野に立ち、優等生の仮面を脱ぎ捨てたい。

「…わかった。大学を休学して、手伝う。でも、条件がある。うちの家族のことは、絶対に撮らないでくれ」

翔太は、まだ、父の「正しい家族」という檻を、守ろうとしていた。

第三章：家族の崩壊と隠蔽（美和の視点）

1. 完璧な舞台の亀裂

高橋美和の人生は、夫・正志の「中学校教師」という確固たる地位と、長男・翔太の「名門大学生」という輝かしい未来という、二つの柱に支えられた**完璧な舞台**だった。彼女は、その舞台が地域社会から賞賛されるよう、照明の位置、小道具、そしてキャストの立ち居振る舞い（家族全員の行動）を厳しく管理してきた。

しかし、その完璧な舞台が、今、音を立てて崩れようとしていた。

翔太が帰省し、食卓で告げた一言が、美和の心臓を鷲掴みにした。

「父さん、母さん。大学を一年、休学することにした。奨学金は一旦止める。その間、東京の幼なじみと映像制作の仕事をする」

美和は手に持っていた茶碗を取り落としかけた。

「休学？映像制作？翔太、何を言っているの？あなたは来年、大学院への推薦が決まっているのよ。今、レールから外れたら、これまでの努力がすべて無駄になるでしょう！」

美和が恐れているのは、翔太の「努力の無駄」ではない。彼がレールから外れることで、長年彼女が積み上げてきた「高橋家は立派で、すべてが順調である」という地域社会への見栄と信用が、一瞬で瓦解することだった。

「近所の奥さんたちは、あなたのことを誇りに思っているのよ！あなたは、私たち夫婦の生きた証なの！それを、そんな曖昧な、水商売みたいな仕事のために投げ捨てるなんて……！」

美和の言葉は、翔太の自由な選択を認めることを「自分の存在の否定」だと叫んでいた。

2. 偏見という名のセメント

翔太は冷静に答えた。「曖昧じゃない。自分の本当にやりたいことを見つけるための、必要な回り道だ。それに、一緒にやるのは、佐々木陽菜だよ。幼なじみの」

「佐々木…！？」美和の顔から、一瞬にして血の気が引いた。

「あの、佐々木さんの娘ね」

美和の声は、感情を剥ぎ取った冷たい響きが変わった。佐々木陽菜の家は、この地域ではずっと「異端」だった。駆け落ち同然で結婚し、経済的にも厳しく、地域の集まりにも積極的でなかった。美和にとって、佐々木家は、自分たちの「正しい規範」を脅かす、最も触れてはならない「外部」の存在だった。

「いい、翔太。あの子と関わるのは、絶対にやめなさい」

美和は立ち上がり、まるで毒を吐き出すかのように言った。

「あなたは知っているでしょう、佐々木さんのところは、昔から地域でどう言われていたか。父親は定職に就かず、母親は近所づきあいを見捨てて…。そういう『レールから外れた』家庭と関われば、世間は『やっぱり高橋さんの家は、あんな子たちと関わったから崩れた』と言うわよ！」

美和の檻の壁は、「世間体」という名のセメントと、佐々木家への「偏見」という名の砂で固められていた。美和は、翔太の未来よりも、社会の目が自分たちをどう評価するかを優先し、平然と偏見を武器にして息子をコントロールしようとした。

「あなたは、お父さん（正志）が長年築き上げた『高橋正志先生』の信用を、一瞬でゼロにするつもり？そんなことをしたら、お父さんの人生、そして私の人生まで、すべて否定されるのよ！」

3. 正志の沈黙と罪悪感

美和は、次に夫・正志に向き直った。

「あなた！あなたは、なぜ黙っているの！教師として、この子の道筋を示すべきでしょう！」

正志は、食卓でただ一人、静かに俯いていた。彼の脳裏には、過去の記憶がフラッシュバックしていた。

二十数年前。佐々木家の夫婦が、地域の規範から外れたことで、学校行事や地域の活動から遠ざ

けられていたとき、教師である正志は、見て見ぬふりをした。「正しい規範」を守るためには、「異端」は排除されるべきだと、無意識に判断したからだ。

当時、佐々木陽菜は、正志のクラスでいつも明るい笑顔を浮かべていた。正志は、その笑顔の裏に、地域からの偏見や経済的な苦勞があることを知りながら、教師として「家族間の問題に深入りするべきではない」という檻の中に引きこもった。

正志の「正しさ」は、佐々木家への「無関心の沈黙」として機能したのだ。

美和の苛烈な言葉が、彼の過去の罪を再びえぐり出す。

「あなたが教師として、佐々木さん一家を『普通の道』に戻せなかったから、今、その娘が私たちの大切な息子を、間違っただ道に引きずり込もうとしているのよ！全てあなたのせいよ！」

正志は、顔を上げることもできず、ただ、震える声で呟いた。

「…美和。それは違う。佐々木さんが、間違っていたんじゃない。…私が、恐れていたんだ」

正志は、初めて、自分自身の「規範の檻」が、他者や自分の感情を排除する防衛線であったことを認めた。そして、翔太の「優等生の檻」も、光希の「自己否定の檻」も、佐々木家の「偏見の檻」も、すべて自分の「正しさ」という名の壁と無関係ではないと悟った。

その瞬間、美和が長年守り続けてきた「完璧な家族」という舞台は、静かに、そして完全に崩壊した。美和は、床に座り込み、声にならない嗚咽を漏らしながら、自分の世界が粉々に砕け散るのを感じていた。

第四章：規範という名の壁（正志と翔太の対決）

1. 誠一の言葉と正志の自問

美和が自室にこもった翌日、藤森誠一がいつものように囲碁盤を持って高橋家を訪れた。正志は憔悴しきっていたが、誠一は一切の詮索をせず、ただ静かに石を並べ始めた。

囲碁盤を挟み、沈黙が支配する。しかし、その沈黙はかつての「断絶の沈黙」ではない。互いの弱さを共有する、重くも穏やかな沈黙だった。

誠一が、ぼつりと語り始めた。

「…私の沈黙は、義父（よしそう）の『命を懸けた沈黙』から受け継がれたものです。戦争を生き抜くための沈黙が、戦後の家庭では、感情を殺す檻になってしまった」

正志は、その言葉を反芻した。

「私の『正しさ』も同じだ。教師という役割、地域社会の『規範』。私は、それらを盾にして、佐々木さん一家のような『異端』や、光希くんのような『繊細な魂』を排除した。それは、自分の感情や弱さ、そして家族の不完全さが露呈するのを、恐れていたからだ」

誠一は、正志の顔を真っ直ぐに見て言った。

「高橋さん。私たちは、息子に『自分たちの生きた証』を背負わせようとしていたのかもしれませんが、『立派な父の息子』『優秀な教師の息子』として生きることを、無言で強制していた。それは、愛ではなく、重しです」

正志は、初めて他者から「教師」でも「地域の顔」でもなく、一人の「父」としての自分の過ちを指摘された。誠一の言葉は、正志が長年かけて築いた「規範の檻」の壁に、決定的な亀裂を入れた。

「…翔太は、私には何もかも持っているように見えた。だから、なぜ、わざわざルールから外れる

のか理解できなかった。だが、彼は、そのレールの上で、ずっと息苦しさに耐えていたんだな」

2. 父と息子の真実

その夜、正志は、静かにリビングで待っていた。翔太は、母との衝突のショックで、荒れた顔をしていた。

正志は、教師としての口調ではなく、ただ一人の父として語り始めた。

「翔太。お前の休学の件について、母さんは感情的になりすぎた。…だが、私もだ。正直、理解できない。お前は、この地域で、そして東京でも、ずっと『正しい道』を歩いてきた。それなのに、なぜ、わざわざ茨の道を選ぶ？」

翔太は、初めて父の目を見て、優等生の仮面を脱ぎ捨てた本音をぶつけた。

「父さんの『正しい道』は、僕の道じゃない！僕は、ずっと父さんの期待に応えるための『役割』を演じてきた。父さんが『教師』という役割に縛られていたように、僕は『高橋先生の立派な息子』という役割に縛られていたんだ！」

翔太の言葉は、怒りよりも、深い悲しみを帯びていた。

「東京で、僕は光希の動画を見た。荒野に立つ、鎖に繋がれた人物の絵。父さんが光希に『ちゃんとしろ』と言っていた裏で、光希は『迷惑をかけない』という鎖で、自分を縛っていた。そして、僕は『期待に応える』という鎖で、自分を縛っていた。僕たちの檻は、違うようで、同じ素材でできていたんだ」

翔太は、涙を堪えながら続けた。

「僕は、優等生の仮面の下で、ずっと死んでいたんだ。光希の動画を見て、佐々木陽菜に会って、自分の本音を表現したいという、あの荒野に咲く花のような『生きた証』が欲しいと思った。それが、僕にとっての挑戦だから」

3. 規範の解体

正志は、息子の叫びを、一言も遮らずに聞いた。

そして、静かに立ち上がり、頭を下げた。

「…済まなかった。翔太。私は、教師としての『正しさ』を、お前に押し付けた。お前を愛していたからこそ、世間の厳しさから守りたかった。だが、その愛は、お前の魂を窒息させる透明な檻だった」

正志は、初めて、規範という名の壁を自らの手で解体し始めた。

「お前の生き方は、私が過去に無視してきた人々の声なんだな。佐々木さん一家が、規範から逃げて選んだ自由。光希くんが、沈黙の中で見つけようとしている表現。お前の選択は、私が間違っていたことの証明だ。だが、私は、もう、その証明から逃げない」

正志は、翔太に手を差し出した。

「お前が選んだ道が、茨の道であろうと、私はもう、口出ししない。ただ、一つだけ約束してくれ。お前の人生の主演として生きろ。それが、父としての私の、最後の教えだ」

翔太は、震える手で父の手を握った。それは、長年、正志の「規範」と翔太の「期待」という鎖で繋がれていた、父と子の魂の解放の瞬間だった。

美和は、自室のドアの陰で、そのすべてを聞いていた。彼女の「完璧な家族」という檻は完全に崩壊したが、その崩れた壁の向こうに、初めて見る血の通った夫と息子の姿があった。彼女は、恐怖と、そしてわずかな希望を感じていた。

終章：荒野に咲く花

1. 規範からの解放

義蔵の死から一年が経とうとしていた。

高橋正志は、もう中学校の「先生」ではなかった。彼は定年後、地域社会の小さな集まりに参加し続けていたが、以前とは様子が違っていた。彼は背筋を伸ばして模範を示そうとはせず、時折、静かに沈黙するようになった。

ある日、地域の会合で、近隣の若い夫婦の生活態度について議論が起こった。昔ながらの「規範」を重んじる古老たちが、「今の若い者は、地域のしきたりをわきまえなさすぎる」と批判し始めた。

以前の正志ならば、教師としての経験から「正しい」意見を述べ、規範の維持に加担しただろう。だが、彼は深く沈黙した後、ゆっくりと口を開いた。

「…私は、長年、教師として地域の『正しい規範』を守り続けてきました。しかし、規範とは、時に透明な檻になる。そして、その檻の壁は、私自身の弱さと恐れでできていたと、今、痛感しています」

正志は、佐々木家のご両親が地域社会から受けた偏見、光希のひきこもりの痛み、そして息子・翔太が優等生の仮面の下で苦しんでいた事実を、自分の失敗として語った。

「私が守ろうとした『正しい家族』という看板は、私の息子を窒息させていた。規範というものは、誰かを排除したり、誰かの痛みを目をつぶるための武器になっていないでしょうか。私たちに必要なのは、正しさではなく、互いの痛みに寄り添う共感ではないでしょうか」

彼の言葉は、会場に重い静寂をもたらした。それは、美和が長年守ろうとした「世間体」という名の檻が、地域社会の規範の核から解体され始めた瞬間だった。美和は、彼の隣で、初めて、夫を「先生」としてではなく、一人の弱さを抱えた人間として受け入れることができた。

2. 表現の共鳴

翔太は、東京に戻り、陽菜と共に映像制作に没頭していた。彼らの最初のドキュメンタリーのテーマは、陽菜の両親の「駆け落ちの物語」だった。地域社会の規範という檻から、愛を選んで飛び出した二人の大人の生き様。

翔太は、その制作を通して、自分の「優等生の仮面」を完全に脱ぎ捨てた。カメラを構えることは、彼にとって、世界を正しく認識する挑戦そのものだった。

そして、彼らは光希の映像と出会った。光希が匿名でアップロードし続けている、内面の風景を描いた短い動画の数々。

陽菜は翔太に言った。「ねえ、翔太。この光希の動画は、私たちの物語の対照軸だ。『規範から逃げた私たち』と、『檻に閉じこもったまま戦い続けた光希』。どちらも、この社会の沈黙の犠牲者だけど、その魂の強さは同じだよ」

翔太は、陽菜のドキュメンタリーの主題歌として、光希の描いた絵のイメージを音楽にすること

を提案した。

「荒野に咲く花だ。誰にも見られなくても、自分の場所に咲いている、**生きた証**」

光希の「自己肯定の檻」の中での静かな表現が、陽菜の「偏見の檻」を打ち破るための力強いメッセージとなり、翔太の「期待の檻」を壊すための音となった。三世代の「沈黙の連鎖」が、次の世代の「表現の共鳴」へと昇華されたのだ。

3. 壁は、自分自身だ

ある日、光希の部屋の窓は開け放たれていた。彼は、もうカーテンを閉ざしていない。部屋には、外の湿った空気と土の匂いが流れ込んでくる。

彼のキャンバスの前に立つ。かつて裏返しにされていたあの未完成の絵は、今は完成していた。鎖は消え、荒野に立つ人物の足元から、無数の小さな花が生み出されている。

妹の結が帰省し、その絵を見た。

「お兄ちゃん。それは、おじいちゃんが守りたかった『家』だね。場所や形じゃなくて、あなたの心の中の、**命のあり方そのもの**」

光希は、祖父・義蔵の日記に書き残された言葉を、静かに思い返した。

「**壁は、自分自身だ。**」

義蔵の壁は「死の覚悟」であり、誠一の壁は「沈黙の責任」であり、遥の壁は「完璧な役割」だった。高橋正志の壁は「規範の正しさ」であり、美和の壁は「世間体」だった。

そして、光希の壁は、「傷つくことへの恐怖」と、「迷惑をかけてはいけない」という自己否定だった。

光希は、キャンバスの前に立つ。

「壁とは、乗り越えるべき障害ではない。それは、**自分が何者であるかを定義づける、唯一の足場だ**」

彼は、もう、自分の影から逃げようとはしない。荒野に咲く小さな花は、力強く、そして穏やかだった。彼の挑戦は、まだ始まったばかりだ。

(物語 完)

登場人物紹介

名前	世代/立場	「透明な檻」の正体	挑戦の方向性
高橋 正志 (たかはし まさし)	父 / 元中学校教師	「教育者の正しさ」と「地域の規範」(他者の痛みを無視する防衛線)	誠一との交流、そして地域での 自身の過ちの開示 による規範の解体。
高橋 美和 (たかはし みわ)	母 / 正志の妻	「世間体」と「役割の完璧主義」(家族をコントロールする偏見)	夫と息子の崩壊を受け入れ、 役割からの解放 と真の家族の姿を模索。
高橋 翔太 (たかはし しょうた)	息子 / 大学生	「期待」と「優等生の仮面」(ルールから逸脱する恐怖)	陽菜との映像制作を通じた 表現への挑戦 と、父のルールからの離脱。
佐々木 陽菜 (ささき ひな)	幼なじみ/ 映像制作者	「社会の偏見」と「外部の人間」(家庭環境による地域からの排除)	映像制作を通じた社会との闘いと、 規範からの自由の獲得 。
藤森 光希 (ふじもり みつき)	孫 / (主人公)	傷つくことへの恐怖と、自己否定(「迷惑をかけてはいけない」という声)	匿名での映像表現と絵画による自己肯定を続け、 表現の共鳴 を促す。

あとがき（作者の言葉）

『透明な檻の中で4』までお読みいただき、心より感謝申し上げます。

このシリーズを通じて私たちが描きたかったのは、「透明な檻」が、家族という内的な空間だけでなく、地域社会の「規範」や「世間体」、そして「偏見」という、**外的な圧力**によっても形成されるということです。

高橋先生の「正しさの檻」と美和さんの「世間体の檻」は、佐々木陽菜さんのご両親のような「異端」を排除することで維持されていました。そして、その排除の文化が、光希くんのような繊細な魂を、ますます内側の檻へと追いやっていったのです。

しかし、物語の終わりに、光希の「表現」が、高橋家の「規範」を揺さぶり、翔太と陽菜の「自由な挑戦」へと繋がりました。**沈黙と諦めから生まれた鎖が、表現と共感によって解放される。**

壁は、乗り越えるものではなく、自分が何者であるかを理解するための足場です。読者の皆様が、それぞれの心の中の荒野で、小さな「生きた証」を見つけられることを願ってやみません。

令和8年穀雨

KHJ 岡山きびの会 “ふじさん”